



～触る力を上手に育てる～

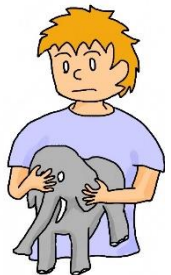
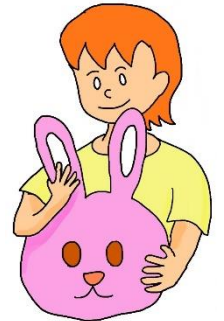
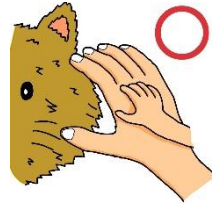
情報の80%は視覚からと言われるほど視覚の役割は重要で、見える子どもにとっては簡単に得られる情報であっても、見えにくさがあると自分から積極的に知ろうとすることが必要となります。見えにくさを補うための感覚の1つとして、触覚すなわち触って理解することが挙げられます。しかし、見えにくさのある子どもの中には、触ることに強い不安を感じる子どももいます。知らないものや初めてのものに対してどんな様子か目で見て確認することが難しいからです。

子どもに体験させたいからという思いから、よかれと思って子どもの手を取って触らせようとすると、子どもは余計に不安や恐怖を感じてしまいやすくなるかもしれません。まずは、子どもの気持ちを安心させるために楽しそうな雰囲気づくりをしたり、触らせようとするものを言葉で描写してあげたりします。そして、大人の手の甲に子どもの手を乗せて対象に触り、大人の手を通して感触の見通しを持たせ、安心できたことを確認してから、少しずつ手をずらして一緒に触れるようにするとよいでしょう。

子どもが自分で触ることができるようであれば、一部分の表面を触るだけでなく、全体の輪郭を端から端までなぞったり、大きな物は両手をいっぱい広げて大きさを知ったりします。また、特に盲児の場合は、触る面と対面するのではなく、自分と同じ方向に向けて触るほうが分かりやすいこともあります。前にいる人を後ろから目隠しをするようなやり方です。

象など、子どもにとって一般的にはなじみのあるような動物であっても、実際に触ることが難しい場合は、ミニチュアを触って、図鑑では分かりにくい立体感や質感を体験できるようにします。子どもによってはじっくり目を近づけて細部まで眺めながらしっかり触ります。

何よりも大切なことは、子どもにとって魅力があり好奇心が刺激されることです。実際に経験してみたことがとても楽しかったら、自分から色々なものを知りたいという気持ちが高まり、自分から積極的に世界にかかわっていきこうという気持ちを育てることができます。



★親を信頼できる子どもは自分も人も信頼できる

冒頭のタイトルで、“触る力を上手に育てる”と書きましたが、上の図のように大人の手の甲におんぶするように乗せた子どもの手は、大人を信頼しているからこそできます。つまり、触る力を育むことも、好奇心を育み世界に自分から関わろうとしていく力も、その根底には親との信頼関係が必要です。乳幼児期は自分が困ったときに、上手に伝えることがまだまだできないこともあります。「怖かったの？」や、「さみしかったね」などの気持ちを察して代弁することも多いでしょう。しかし、そうした子どもの泣き声や不安な気持ちにしっかりと応じていくと、人や自分を信頼する力が育つそうです。かえって、依存心の強い子どもになるのではないかと不安を感じる方もいるかもしれませんが、気持ちに答えられないようにした場合、むしろ困難をすぐ回避しようとしたり、努力を放棄したり、さらには人や世界に対する無力感を抱いたりしやすいという追跡観察の結果が出たそうです。

児童精神科医の佐々木正美先生は、こうした結果を受けて、ご著書の中で次のように指摘します。

いくら泣いても、親が気がつかなかったり、面倒がったりすると、子どもは泣いてうたえなくなります。忍耐づよい、がまんづよい子になるかということ、そうではありません。泣いたって、さげんだってだめなんだという、お母さんにたいするある種の不信感と、自分自身にたいする無力感をもって、おとなしい子になっているだけなのです。ちっとも順調な発達ではないのです。

見えにくさのあるなしにかかわらず、乳幼児期の子育てに重要なヒントがたくさん記載されている本書です。ご興味のある方はご一読ください。